

連珠っておもしろい

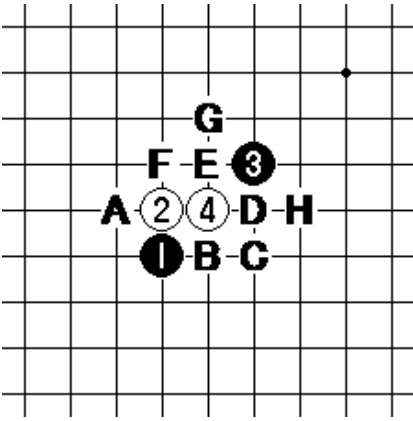
九段 河村典彦

● 第107回 ●

■不思議珠型、疎星

今回は一つの珠型に絞って考えてみたい。それは、「疎星」である。

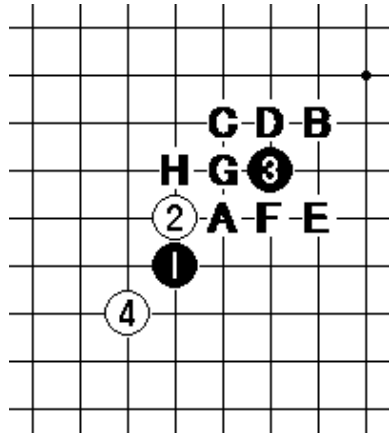
疎星は五目クエストではおそらく人気No.1だろう。あまり知識がなくても打てるし、ソーソロフでなくとも互角の形が多い。



もちろん白4が最強防なのだが、A〜Hまで八題十分打てる。最強防が八題打て

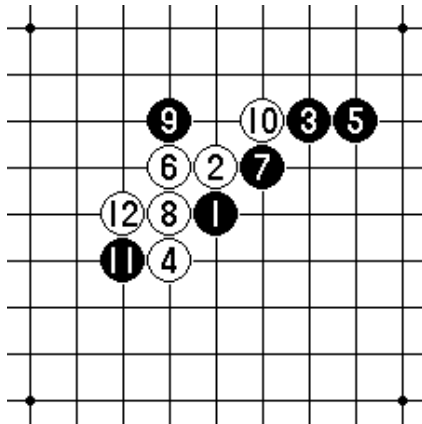
るといのは、溪月峡月にも通じるのだが、ちよつと意味が違う。溪月峡月は定石では黒勝ちだが、疎星は白がどの5を選んでもある程度互角になる。つまり、黒5を一題でも八題でも指定が可能という訳である。こういう白4までの形はあまりない。

今回はその他の白4も八題打てるのか見てみよう。



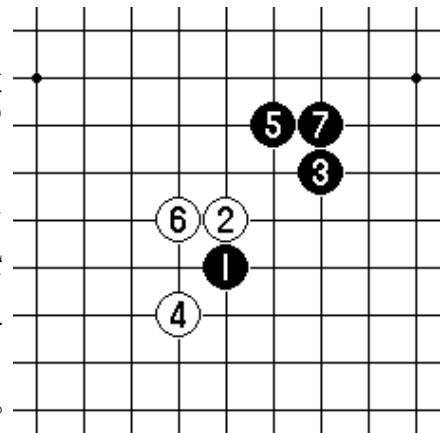
この白4は彗星共通で、次に強防と思うのだが、この4に対して黒5でA〜Hと八題が可能だ。ただし、黒5でAは黒必勝なので、一題は指定できない。ここ

で注意しなければいけないのは、次の黒5は打てないことだろうか。

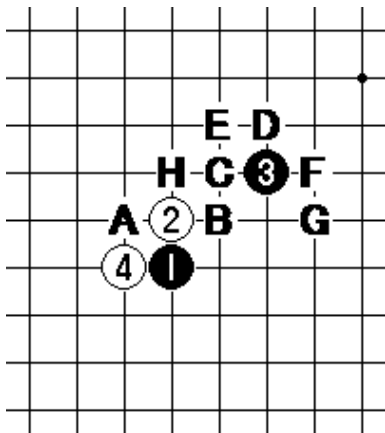


黒5に白6と打たれ、黒は困ってしまう。黒7で一見良さそうだが、白8、10に黒11から止めなければならず、白12とけん制されてはお手上げだ。黒7を107なら簡単に三々禁になってしまう。

また、黒5をCの時は次図に示すように黒7とけん制するのが必勝の一手となる。黒5を7でも同じ理屈である。黒5をEもCと引いて7と打てば同じである。

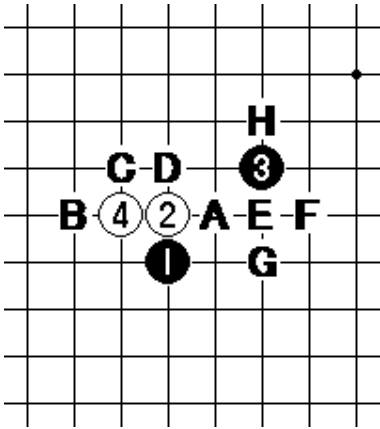


次の白4を見てみよう。白4は遊星共通で一見強そうだが、これも八題が可能だ。AやBでは定石に戻ることで、それ以外を指定することになる。今度はFの位置に打つことが可能だ。



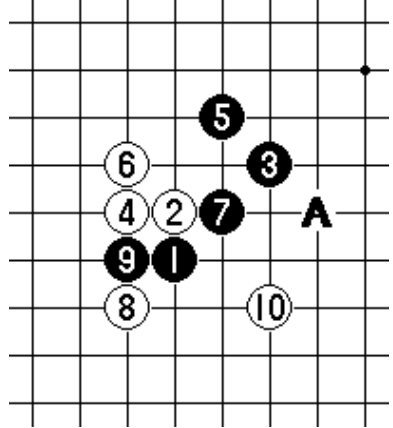
その他、黒5は3の一路下に打つこともできるので、八題を黒が選ぶことができる。

次の白4は昨年の名人戦挑戦手合いでも出現した一手だ。こういう4が決定戦でも出るといのが時代が変わった証拠でもある。

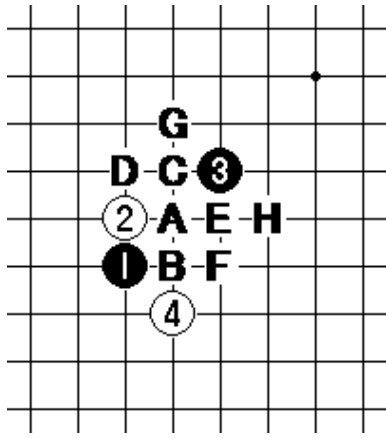


決定戦では黒5は六題でGが選ばれたが、その他にDやHが打てそうなので、これも八題が可能である。黒5でA以外なら、白はどれも選べそうだ。なお、この4は流星からも打てるので、研究しておけば流星から派生することもできる。

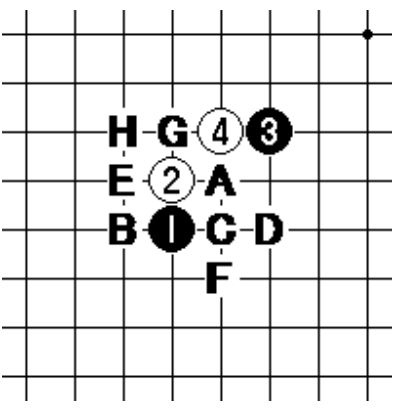
ここで注意しておきたいのは、次の黒5は白6と打たれてちよつと困るということである。



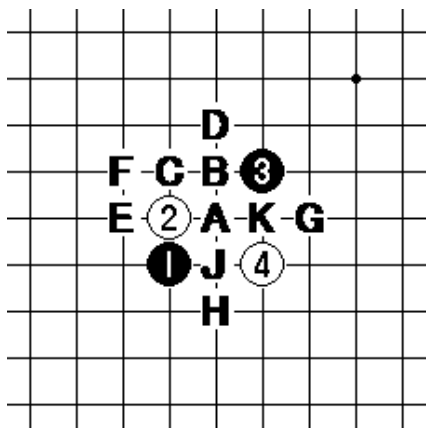
黒7なら白10まであつという間に負けになる。黒5でAと似ているが、そこが大きく異なる点もある。



次の白4はあまり打たれないが、よく見るとこれも流星共通である。疎星から他の珠型に戻るのが斬新な発見で、四珠交替打ちになつて、他の珠型の変化に合流することが多くなつた。黒5はやはり八題が可能で、AやB以外ならこれも白はある程度は戦えそうである。まだまだ白4は可能だ。例えば次の白4。



この4は疎星では珍しく対称形なので、提示できる可能性が半分になつた感じだ。だから案外悩むことになる。一応A〜Hまで行けそう。



この白4は疎星特有の手なのだが、こういう手に対応するのは初見では難しい。一応A〜Hまでを示しておく。J、Kも疎星の難形に戻るので打てそうだが、できれば候補には入れたくない。

以上、いろいろな白4とそれに対応する黒5を調べてきたが、四珠交替打ちになつていろいろな白4が可能となつたので、実戦でもどんどん打ってみたい。最強防だけが疎星ではない。自由に打てるのが連珠の魅力でもある。